キャンプ体験が小学生サッカー選手の自己主張性・抑制性とチーム効力感に及ぼす影響

菅原　将（生涯スポーツ学科　野外スポーツコース）
指導教員　林　綾子

キーワード：　キャンプ　小学生サッカー選手　自己主張性・抑制性　チーム効力感

１．序論

筆者のこれまでのサッカー経験･指導経験から、個人としてまたチームとして必要な能力の中に積極的な自己主張や、自己の欲求を抑えて人の話を聞く自己抑制の力、また集団レベルで持つ共通の「自分達の集団はある行動をすることができる」という自信感を持つことが必要であると考える。そこで「自己制御機能（自己主張性・抑制性）」と「チーム効力感」に着目した。

キャンプという非日常的な共同生活の中で共に楽しんだり、困難を乗り越える体験はサッカーの練習だけでは気付かない自分や仲間の新しい一面を発見したり、より良い集団作りのきっかけとなると筆者は考えた。

そこで本研究はキャンプ体験が小学生サッカー選手達の自己主張性・抑制性とチーム効力感にどのような影響を及ぼすのかを明らかにすると共に、自己主張性・抑制性とチーム効力感との関係性について明らかにすることを目的とする。

２．研究方法

【被験者】実験群：2010 年 8 月 27 日から 29 日に行われたキャンプに参加したＴスポーツ少年団サッカー部に所属する小学校 4～6 年生 18 名。

統制群：このキャンプに参加していない近隣のＮスポーツ少年団サッカー部に所属する小学校 4～6 年生 19 名。

【調査方法】自己制御機能（自己主張性・抑制性）を測定するために、檣本ら(2003)が作成した「自己制御評定尺度(児童用)」2 因子 12 項目を用いた。またチーム効力感を測定するために、淵上ら(2006)が作成した「学級集団効力感尺度」を筆者がチーム用に一部修正した3因子15項目を用いた。これらをキャンプ前、キャンプ直後、キャンプ一ヶ月後の計 3 回実施した。また、ふりかえりによる記述調査･コーチ 2 名による観察調査を行った。

３．結果と考察

キャンプを体験した選手はキャンプを体験しなかった選手に比べて、自己制御機能に含まれる自己主張性得点が有意に向上した（図１）。しかし、自己抑制性得点に有意な向上は見られなかった。これは活動中、自分の考えを発言する機会が多かった事や、意見を出すことをスタッフが促したことが背景として考えられる。また、チーム効力感については、キャンプを体験した選手はキャンプを体験しなかった選手に比べてチーム効力感得点が有意に向上した（図２）。これは、選手らが活動の中で様々な課題を解決するためにお互いに意見を出し合い、協力し合った結果、課題を解決することができ、成功体験（チーム効力感の向上に大きな影響を与える要因の一つ）をキャンプ中に積み重ねていくことで選手らは自信感を持つことができ、チーム効力感が向上したのではないかと考えられる。また、観察調査によるコーチの視点からも、以前より選手らはよく発言し、人の話を聞けるようになり、よりよい雰囲気の中で積極的に練習に取り組んでいる様子が見受けられた。

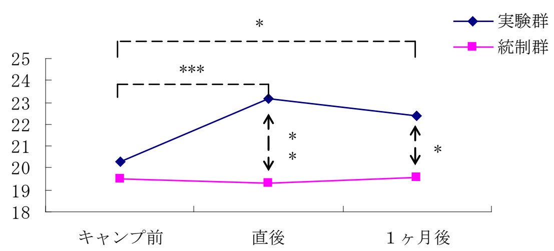

図１．自己主張得点の推移

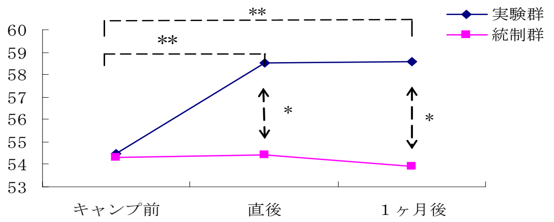

図２．チーム効力感得点の推移

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

また、被験者の中でキャンプ直後において自己制御機能に含まれる自己主張性得点が向上した被験者（向上群）とそうでない被験者（非向上群）のチーム効力感得点の推移を比べると、キャンプ直後において、向上群は非向上群に比べてチーム効力感得点が有意に向上していた。

この理由として、自己主張性が向上する事で一人一人が自分の意見や考えを発言するようになり、チームメイト一人一人への理解が高まったと考えられる。それがコミュニケーションを活性化させ、チームの親密性の向上、モチベーション向上にも作用し、選手らのチーム効力感の向上に影響を与える一因になったのではないかと考えられる。

４．まとめ

小学生サッカー選手達の自己主張性・抑制性やチーム効力感の向上には、各々が自分の意思や考えを発言し、一人では解決できない課題を仲間と共に協力して解決していく体験が効果的であることがわかった。特に小学生の時期には、このような活動中の指導者の介入もその体験の効果に大きな影響を及ぼすことがうかがえた。

5. 引用文献

１）淵上克義・今井奈緒・西山久子・鎌田雅史（2006）集団効力感に関する理論的・実証的研究. 岡山大学教育学部研究収録第 131 号:p141-153.

２）檣本千里・伊藤順子・山崎晃（2003）幼児・児童の自己制御機能と自己実現との関連. 広島大学大学院教育学研究科紀要第 3 部第 52 号:p363-369.